

使徒言行録 第18章24～28節

私たちはこれまで、使徒言行録からパウロの伝道活動の話を中心に聞いてきました。パウロがまだサウロと呼ばれていたころ、神様に対する熱心さからイエス・キリストを偽物と思い込み、クリスチャンを迫害していたパウロでしたが、ダマスコへの途上で復活の主イエス・キリストと出会い、回心します。その後、伝道旅行に出かけたパウロはすばらしい伝道活動を行ったことが使徒言行録に記されています。ところが今日の聖書の箇所では、アポロというあまり聞きなれない名前の人物が出てきます。このアポロに関しては、パウロが書いたコリントの信徒への手紙一にその名前がよく出てきますが、その中でも3章4節以下に有名な話がありますので、見てみたいと思います。新約聖書302ページ、コリントの信徒への手紙一3章4節です。【ある人が「わたしはパウロにつく」と言い、他の人が「わたしはアポロに」などと言っているとすれば、あなたがたは、ただの人にすぎないではありませんか。アポロとは何者か。また、パウロとは何者か。この二人は、あなたがたを信仰に導くためにそれぞれ主がお与えになった分に応じて仕えた者です。わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし、成長させてくださったのは神です。ですから、大切なのは、飢える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。】このように、コリントの教会はパウロが植え、アポロが水を注ぎました。すなわち、パウロはコリントの教会を立て上げ、アポロがコリントの教会の成長を助けた。コリントの教会ではパウロもアポロもたいへん大きな存在であった。パウロが書いた手紙から、私たちはこのようなことがわかります。このアポロが登場するのが、今日の聖書の箇所になります。そして、今日の18章24節から、このアポロがアレクサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しい雄弁家であったことがわかります。そして25節には、アポロが主の道を受け入れたこと、すなわち彼はキリストを信じるクリスチャンであったこと、そしてイエス様のことを熱心に語り、正確に教えていたことが記されていますが、彼は「ヨハネのバプテスマしか知らなかった」ということが記されています。イエス様の教えを知っていたのに、ヨハネのバプテスマしか知らなかった。これはいったいどういうことでしょうか。そこで私たちは今日、ヨハネのバプテスマについて聖書から一緒に見てみたいと思います。

ルカによる福音書3章1節をお開きください。新約聖書105ページになります。

【皇帝ティベリウスの治世の第15年、ポンティオ・ピラトがユダヤの総督、ヘロデスがガリラヤの領主、その兄弟フィリポがイトラヤとトラコン地方の領主、リサニアがアビレネの領主、アンナスとカイアファとが大祭司であったとき、神の言葉が荒れ野でザカリアの子ヨハネに降った。そこで、ヨハネはヨルダン川沿いの地方一帯に行き、罪の赦しを得させるために悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。これは、預言者イザヤの書に書いてあるとおりである。「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。谷はすべて埋められ、山と丘はみな低くされる。曲がった道はまっすぐに、でこぼこの道は平らになり、人は皆、神の救いを仰ぎ見る。』」そこでヨハネは、バプテスマを授けてもらおうとして出て来た群衆に言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばな

い木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。」そこで群衆は、「では、わたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」と答えた。徴税人もバプテスマを受けるために来て、「先生、わたしたちはどうすればよいのですか」と言った。ヨハネは、「規定以上のものは取り立てるな」と言った。兵士も、「このわたしたちはどうすればよいのですか」と尋ねた。ヨハネは、「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言った。民衆はメシアを待ち望んでいて、ヨハネについて、もしかしたら彼がメシアではないかと、皆心の中で考えていた。そこで、ヨハネは皆に向かって言った。「わたしはあなたたちに水でバプテスマを授けるが、わたしよりも優れた方が来られる。わたしは、その方の履物のひもを解く値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたたちにバプテスマをお授けになる。そして、手に箕（み）を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」ヨハネは、ほかにもさまざまな勧めをして、民衆に福音を告げ知らせた。】

ここにヨハネが授けたバプテスマの話が出てきます。彼が授けたバプテスマは、悔い改めのバプテスマでした。「悔い改め」はギリシア語で向きを変えること、方向転換の意味を持つ言葉です。それまで私たちの心や思いが神様の方向に向いていなかった。それを方向転換して神様の方へともう一度向き直ること。これが悔い改めの元々の意味です。ですからバプテスマのヨハネが悔い改めのバプテスマを授けたということは、その出来事を通して人々の目がもう一度神様に向けられること、すなわち神の独り子であるイエス・キリストに心を向けるためのバプテスマでした。それに対し、イエス・キリストの名によるバプテスマとは、来週の礼拝でくわしく見たいと思いますが、パウロがローマの信徒への手紙の6章に記されていますように、イエス・キリストの十字架の死と復活に与るバプテスマでした。すなわち、水の中に沈められることはイエス・キリストの十字架と共に死ぬことであり、そこから水の上に起こされることはイエス・キリストの復活の命と共に新たな命に生きることを意味します。このようにバプテスマのヨハネが施したバプテスマが人々の目をもう一度神様へと立ち返らせる悔い改めのバプテスマであったのに対し、イエス・キリストの名によるバプテスマは人々を十字架と復活の命へと導くことを象徴的に表しているバプテスマでした。

この違いはルカによる福音書3章7節以下のヨハネの会話の中にも現れてきます。バプテスマのヨハネは、人々の心の目を神様の方向へ向けさせようと悔い改めの言葉を語ります。「悔い改めにふさわしい実を結べ」。自分たちの先祖がアブラハムであると思うな。自分たちはアブラハムの血を引く者、神から選ばれた民であると思うな。悔い改めは血筋によるのではなく、その行いによるのである、とバプテスマのヨハネは語ります。では、その悔い改めにふさわしい実とは何か。ヨハネは11節でこう答えます。「下着を二枚持っている者は、一枚も持たない者に分けてやれ。食べ物を持っている者も同じようにせよ」。下着を二枚持っている者。これは決して多い数ではありません。しかしヨハネは語ります。たとえ2枚でも何も持たない者よりは多いではないか。自分の持ち物が多いのか少ないのかではなく、自分よりも持たない人と分かち合いなさい。そうヨハネは語るのです。さらに徴税人には「規定以上のものを取り立てるな」と言い、兵士には「だれからも金をゆすり取ったり、だまし取ったりするな。自分の給料で満足せよ」と言います。徴税

人は規定以上のものを取り、兵士は金をゆすりだまし取ることが当たり前のことでした。しかしこれらは十戒の「盗むな」「偽証するな」という戒めに反します。バプテスマのヨハネは、特別に良いことをしなさいとは語っていません。今行っている不正、人から必要以上にだまし取ったりしていることがあるのなら、それをやめなさい。元の自分の本来の仕事に戻りなさい。それが悔い改めにふさわしい実を結ぶことである、と語るのです。

バプテスマのヨハネが語ったことはとても大事な、重要な話です。しかしそれでもなお、イエス・キリストの福音と本質的に違うところがあります。バプテスマのヨハネは、なぜ悔い改めにふさわしい実を結ばなければならないのか、その理由を7節でこう語ります。

「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか」。バプテスマのヨハネは、差し迫った神の怒りを受けないために、悔い改めのバプテスマを受け、それにふさわしい実を結べ、と人々に迫るのです。

それに対し、イエス様は決してそのようには語りません。差し迫った神の怒りを免れるために、悔い改めにふさわしい実を結べ、とは言われません。イエス・キリストの福音は、無条件の救いです。私たちが悔い改めにふさわしい実を結んだから、良い行いをしたから、神の怒りから免れることができたのではありません。そうではなく、私たちは無条件に、イエス・キリストの十字架の贖いによって神の怒りから免れるようになった。そして私たちは、神の怒りから免れたばかりではなく、イエス・キリストの十字架と復活にあずかるバプテスマによって、私たち自身が生まれ変わって新しい命に生きる者となった。だから、イエス・キリストの十字架によって無条件に救われ、復活によって新しい命に生きるようになった私たちは、ふさわしい実を結ぶように生きることができる。そのように変えられていくことができる。神様によってふさわしい実を結ぶことができる者へと造り変えられていくことができるのだ。そう語るのです。

イエス・キリストの福音は、実を結ぶことができる者だけのためにあったのではない。実を結ぶことのできない者のためにこそ、イエス・キリストの福音はあった。イエス・キリストは、実を結ぶことのできない者のためにこそ、十字架にかかれたのではなかったか。そうすると、ここに出てくる「実を結ぶことのできない者を焼き払う火」とはいったい何を表しているのでしょうか。それは、私たち自身が焼き尽くされ、イエス・キリストの十字架の死と共に死に与ることを意味しているのではないのでしょうか。自分の力では実を結ぶことのできない者たちが、その人たちのためにこそ十字架にかかれたイエス・キリストの死と共にあずかる者として、私たちは一度焼き尽くされなければならない。一度死ななければならない。それが聖霊と火のバプテスマなのです。こうして一度死んだ者、イエス・キリストの十字架の死と共にあずかった者は、イエス・キリストの復活の命にもあずかることができる。聖霊と火のバプテスマとは、私たち自身が聖霊なる神の力、風によって吹き飛ばされ、自分の力では実を結ぶことのできないのだと思い知らされた時に、私たちを吹き飛ばし火で焼きつくすバプテスマによって、新しく生まれ変わらせてくださり造り変えてくださること。それが聖霊と火のバプテスマなのです。

今日の聖書の箇所、アポロはヨハネのバプテスマしか知りませんでした。悔い改めのバプテスマしか知らなかったのです。ところが、その後19章に入りますと、アポロはイエス・キリストの名によるバプテスマを受けます。その話はまた来週、ご一緒に聖書から聞きたいと思います。お祈りしましょう。